

「徳は事業の基なり」。古典に学び、徳を磨いて、信頼される経営者に

もとい



めには、どのようなことが必要でしょうか。

杉山 「徳」という字は、行人偏、つまり「イ」という字を書きまます。そして「十四」と書きまます。漢字で十四の心と書く。

杉山 確かに、十四と書きますね。そして、十四の下に「心」という字がある。つまり、十四の心のことだった行いを毎日することではないでしょうか。私の場合はこ

二十〇三十年ほど、毎朝八時に来て、学校の周りに落ちている吸い殻やごみを百二十〇百三十ほど拾い捨てています。

杉山 この辺は街中ですから、口の付いた吸い殻や、中には火のついたものが落ちてきています。

杉山 あえて言えば、「ごみ拾い健康法」です。この口紅が付いていた吸い殻にも、「拾って来てありがごと」という気持ちになってしま。朝少し調子が悪くても、五十分くらい吸い殻拾いをする

と元気が出てくるんですよ。たまに近所での主人が「杉山先生、私がやりますよ」と言って掃除を手伝ってく

れる。それもまたうれしい。だから、「徳」というのは、自分から「俺は徳のある人間だ」とアピールすることではなく、「あの人は日ごろから

のがあります。定期的な合唱をやるのですが、書くというところが大事なんです。

杉山 そうです。近くに指導者がいて、「おまえ、なかなか立派になってきたな」と確認してもらえればいいのです。清水を繰り返すことは、自分の人間修の蓄積が五百枚になった、千枚になった、五千枚になったと客観的に評価できるバロメーターにもなっています。

杉山 「読書」というのは、「読んで書く」。読むだけでは、片手落ちなのです。おそらく、畠さんも体感されていると思いますが、「書く」を伴う勉強もしていいかと、不思議と言葉にキレがなくなってきました。

杉山 では、書くことも前提に、「報徳」の読者向けに、杉山さんおすすめの名言をいくつか紹介していただけないでしょうか。

杉山 二つご紹介。一つ目は「発菩提心を百万回千万回起すべきなり」。これは曹洞宗の道元禅師の言葉で、意志薄弱の凡人も決意を繰り返せば、意志強固な人物に変身できるという教えです。

杉山 二つ目は、「順天の者は命壽し、逆天の命短し」。孟子の言葉で、天地自然摂理に合わせれば長命であり、逆ならば短命になるぞということです。

杉山 そして三つ目は、「人間学読書会」の開催三百回記念でつくった日常生活の四源句です。「置、自懐天懐、視仁眼長所、転・感謝満足、産・報恩活力」。これは、「自懐

行いのいい、品位のある、人徳のある人だ」と周りから評価され、自然に定まってくるものなのです。経営者も社員や取引先から、そのように見られることが重要なのではないのでしょうか。

杉山 経営者が社員にもお客様にも、行動見本を見せられるかどうかですね。

杉山 司令をしないで、人物、魅力、器量だけで経営ができればうれいことです。「論語」にも「その身正しければ、令せずして行われる。その身正しからざれば、令すと云えども従わず」とあります。こうした二千五百年前の古代思想が、現代においても特にトップリーダー層に支持されるのはなぜでしょう。

杉山 誰もが「人物器量の社長」、換言すれば「社員から信頼される社長」になりたい。そのため、に、「論語」をはじめとする東洋の名著に取り組んでいるのです。

杉山 孔子の孫の作と伝えられる「中庸」という古典に、「政を為すは、人に在り

とあります。よい政治を行うには優れた人材を集めることが必要であるという教器量を大きくして魅力ある為政者たることを説く名言です。

今も読み継がれる中国の古典の多くが生まれたのは、紀元前七〇〇回〜二二〇年。ご存じの方も多いとは思いますが、春秋戦国時代は世の中が大変乱れた時代です。群雄が割拠する分裂状態の中で、多くの政治思想集団が生まれ、それぞれが独自の王朝組織の統治方法を掲げて、政治顧問や宰相としての自己推薦活動をしていました。

杉山 諸子百家ですね。孔子、老子、莊子、墨子、孟子、荀子などの「諸子」、儒家、道家、墨家、法家、名家などの「百家」。

杉山 「前言往行」の学びが人間学を祖とする「儒家一派」として孔子の思想を彼らがまとめた書物が「論語」です。現代資本主義社会において王朝

に替わるのは企業組織です。現代企業の経営者も東洋思想の名著を学び、組織を展覧させようとしています。

東洋の名著にはほかにも、「老子」「韓非子」「孫子」などがあり、時代が下ったところでは、「菜根譚」ですが、特に日本では人気です。一方、日本人が記した名著としては、「言志四録」が挙げられます。「言志四録」は江戸時代の儒学者である佐藤一斎が一八〇〇年代に書いた人間学の著作で、西郷隆盛の愛読書として知られています。かつて、小泉純一郎元首相が国会で「言志四録」について触れ、知名度が上がりました。

昔の立派な人たちが言った言葉や行動の中に取り入るべきものがあり、歴史の人物の名言や行動の中に取り入るべきものがあり、歴史の人物の名言や行動の中に取り入るべきものがあり、歴史の人物の名言や行動の中に取り入るべきものがあります。これから、人間学の勉強です。

では、どのような人間学を学んだらいいのでしょうか。杉山さんは東海地方で、「人間学読書会」を三十三年にわたって主催されています。杉山さんは一九八五年からボランティアによる「〇〇万人の心の緑化作戦」に取り組んでいて、「人間学読書会」もその一環とかがついています。天命と言っているかどうかは分かりませんが、何かしらのミッションがありそうですね。

杉山 「二年の計は作物を、十年の計は樹木を、百年の計は人材を育てよ」という管子の名言があります。今の日本は人心の砂漠化が進行していると感じており、それを防ぐために、「一度限りの人生をどのレベルで生きるか」を学ぶ人間学の普及に思い至りました。

「100万人の心の緑化作戦」提唱者／名著に学ぶ「人間学読書会」主宰者

杉山孝男(厳海)氏

いたります。最初は、「こんなものを捨てて」とマネーの悪さに舌打ちしていたのですが、だんだんやってくるうちに、「ごみが落ちてくるから、お陰様で屈伸運動ができる」「七〇歳を過ぎても元気の素になっている」と考えられるようになり、やがて落ちてくるごみに対して、「ありがとう」と感じるようになりました。

杉山 ポジティブ思考に変わったんです。

杉山 人徳は周りが評価するもの

あえて言えば、「ごみ拾い健康法」です。この口紅が付いていた吸い殻にも、「拾って来てありがごと」という気持ちになってしま。朝少し調子が悪くても、五十分くらい吸い殻拾いをする

と元気が出てくるんですよ。たまに近所での主人が「杉山先生、私がやりますよ」と言って掃除を手伝ってく

れる。それもまたうれしい。だから、「徳」というのは、自分から「俺は徳のある人間だ」とアピールすることではなく、「あの人は日ごろから

のがあります。定期的な合唱をやるのですが、書くというところが大事なんです。

杉山 そうです。近くに指導者がいて、「おまえ、なかなか立派になってきたな」と確認してもらえればいいのです。清水を繰り返すことは、自分の人間修の蓄積が五百枚になった、千枚になった、五千枚になったと客観的に評価できるバロメーターにもなっています。

杉山 「読書」というのは、「読んで書く」。読むだけでは、片手落ちなのです。おそらく、畠さんも体感されていると思いますが、「書く」を伴う勉強もしていいかと、不思議と言葉にキレがなくなってきました。

杉山 では、書くことも前提に、「報徳」の読者向けに、杉山さんおすすめの名言をいくつか紹介していただけないでしょうか。

杉山 二つご紹介。一つ目は「発菩提心を百万回千万回起すべきなり」。これは曹洞宗の道元禅師の言葉で、意志薄弱の凡人も決意を繰り返せば、意志強固な人物に変身できるという教えです。

杉山 二つ目は、「順天の者は命壽し、逆天の命短し」。孟子の言葉で、天地自然摂理に合わせれば長命であり、逆ならば短命になるぞということです。

杉山 そして三つ目は、「人間学読書会」の開催三百回記念でつくった日常生活の四源句です。「置、自懐天懐、視仁眼長所、転・感謝満足、産・報恩活力」。これは、「自懐

行いのいい、品位のある、人徳のある人だ」と周りから評価され、自然に定まってくるものなのです。経営者も社員や取引先から、そのように見られることが重要なのではないのでしょうか。

杉山 経営者が社員にもお客様にも、行動見本を見せられるかどうかですね。

杉山 司令をしないで、人物、魅力、器量だけで経営ができればうれいことです。「論語」にも「その身正しければ、令せずして行われる。その身正しからざれば、令すと云えども従わず」とあります。こうした二千五百年前の古代思想が、現代においても特にトップリーダー層に支持されるのはなぜでしょう。

杉山 誰もが「人物器量の社長」、換言すれば「社員から信頼される社長」になりたい。そのため、に、「論語」をはじめとする東洋の名著に取り組んでいるのです。

杉山 孔子の孫の作と伝えられる「中庸」という古典に、「政を為すは、人に在り

とあります。よい政治を行うには優れた人材を集めることが必要であるという教器量を大きくして魅力ある為政者たることを説く名言です。

今も読み継がれる中国の古典の多くが生まれたのは、紀元前七〇〇回〜二二〇年。ご存じの方も多いとは思いますが、春秋戦国時代は世の中が大変乱れた時代です。群雄が割拠する分裂状態の中で、多くの政治思想集団が生まれ、それぞれが独自の王朝組織の統治方法を掲げて、政治顧問や宰相としての自己推薦活動をしていました。

杉山 諸子百家ですね。孔子、老子、莊子、墨子、孟子、荀子などの「諸子」、儒家、道家、墨家、法家、名家などの「百家」。

杉山 「前言往行」の学びが人間学を祖とする「儒家一派」として孔子の思想を彼らがまとめた書物が「論語」です。現代資本主義社会において王朝

に替わるのは企業組織です。現代企業の経営者も東洋思想の名著を学び、組織を展覧させようとしています。

東洋の名著にはほかにも、「老子」「韓非子」「孫子」などがあり、時代が下ったところでは、「菜根譚」ですが、特に日本では人気です。一方、日本人が記した名著としては、「言志四録」が挙げられます。「言志四録」は江戸時代の儒学者である佐藤一斎が一八〇〇年代に書いた人間学の著作で、西郷隆盛の愛読書として知られています。かつて、小泉純一郎元首相が国会で「言志四録」について触れ、知名度が上がりました。

昔の立派な人たちが言った言葉や行動の中に取り入るべきものがあり、歴史の人物の名言や行動の中に取り入るべきものがあり、歴史の人物の名言や行動の中に取り入るべきものがあります。これから、人間学の勉強です。

では、どのような人間学を学んだらいいのでしょうか。杉山さんは東海地方で、「人間学読書会」を三十三年にわたって主催されています。杉山さんは一九八五年からボランティアによる「〇〇万人の心の緑化作戦」に取り組んでいて、「人間学読書会」もその一環とかがついています。天命と言っているかどうかは分かりませんが、何かしらのミッションがありそうですね。

杉山 「二年の計は作物を、十年の計は樹木を、百年の計は人材を育てよ」という管子の名言があります。今の日本は人心の砂漠化が進行していると感じており、それを防ぐために、「一度限りの人生をどのレベルで生きるか」を学ぶ人間学の普及に思い至りました。

杉山 「人間学読書会」への延べ参加者数は、「三十三年間で五万三〇〇〇人です。単純計算だと六百年ほどかかってしまうのですが、もし六百年後にもノーベル平和賞が存続していれば、日本は全国民が受賞できるのではないかと期待しています。

杉山 杉山さんの人間学普及の取り組みが今後さらに広がることを私も期待しております。本日はさまざまな名言をありがとうございました。

杉山孝男(厳海)氏



畠善昭 会長

畠善昭

「100万人の心の緑化作戦」提唱者

杉山孝男(厳海)氏

すぎやまたかお(がんかい)。1945(昭和20)年生まれ。静岡県立磐田南高校卒業後、銀行に5年勤務。その後、税理士等の多くの資格を取得し、1982(昭和57)年に学校法人名古屋大原学園を設立、現在専門学校15校を運営する。その傍ら、1985(昭和60)年からボランティアによる「100万人の心の緑化作戦」を提唱し、名古屋市・浜松市・静岡市・沼津市の4カ所で東洋の名著に学ぶ「人間学読書会」を33年間にわたり無料開催している(既開催455回・延べ参加者数53,000人)。著作に「名著に学ぶ心の基礎力シリーズ①②③」などがあるほか、CD講話『東洋思想に学ぶ社長の人間学シリーズ①～⑦』も発表。

経営とは何か、事業を成功させる最大の要因は何か。多くの経営者が日々、自問自答している答えなきテーマでしょう。「読書」はその手がかりを得る上で最も手近な方法ですが、あまたあるジャンルの中から、どの分野の本で学べばいいか、これまた難しいテーマです。

そこで私が一つおすすめしたいのが、中国古典です。『論語』をはじめとする春秋戦国期に生まれた名著の数々は、為政者のあるべき姿を説いており、時代を隔てた21世紀の現代社会においても、企業経営者や政治家、高級官僚など組織リーダーの胸を穿つ、鋭い示唆に富んでいます。

今回、学校法人名古屋大原学園の学園長であり、本務の傍ら、東洋思想の普及に精力的に取り組む杉山孝男さんにお話を聞きました。現在は教育者というお立場ですが、杉山さんは元銀行員で、税理士としても経営指導された横顔をお持ちです。経営者が競争激しいビジネスの世界を生き抜く上で、本質的に何が必要かをよくご存じの杉山さんから、経営者が学ぶべき古典の魅力をうかがいました。

わたって主宰されていますが、そうしたものは北陸ではお目にかかれませんが。

杉山 俗語で、「論語読みの論語知らず」とよく揶揄されますが、人間学の学びの究極は実践です。「名言を学ぶ人間学読書会」では、「名言知識を生活で実践できる段階まで高めること」を大事にしています。読書会では、名言の学習レベルを「知識・見識・胆識・徳識」の四段階に分けています。知識は単なる記憶知識、見識は選択眼のある評論家レベルの知識、胆識は実行の伴う実践者知識、徳識は中心者の意思を付度して周りが尊敬実践する知識と捉えています。

また、名言数百句を学ぶ中で、会員自身がこれぞという名言を筆本で和紙に十程度真剣に書きます。この作業を「名言の和紙清書法」と呼んでいます。書くことで名言が血肉化し、実践度合いが向上します。

杉山 「読書」とは読んで書く

うちの職員の行動指針に、「感謝、感謝、感謝」という

杉山 杉山さんは一九八五年からボランティアによる「〇〇万人の心の緑化作戦」に取り組んでいて、「人間学読書会」もその一環とかがついています。天命と言っているかどうかは分かりませんが、何かしらのミッションがありそうですね。

杉山 「二年の計は作物を、十年の計は樹木を、百年の計は人材を育てよ」という管子の名言があります。今の日本は人心の砂漠化が進行していると感じており、それを防ぐために、「一度限りの人生をどのレベルで生きるか」を学ぶ人間学の普及に思い至りました。

杉山 「人間学読書会」への延べ参加者数は、「三十三年間で五万三〇〇〇人です。単純計算だと六百年ほどかかってしまうのですが、もし六百年後にもノーベル平和賞が存続していれば、日本は全国民が受賞できるのではないかと期待しています。

杉山 杉山さんの人間学普及の取り組みが今後さらに広がることを私も期待しております。本日はさまざまな名言をありがとうございました。

杉山孝男(厳海)氏

のがあります。定期的な合唱をやるのですが、書くというところが大事なんです。

杉山 そうです。近くに指導者がいて、「おまえ、なかなか立派になってきたな」と確認してもらえればいいのです。清水を繰り返すことは、自分の人間修の蓄積が五百枚になった、千枚になった、五千枚になったと客観的に評価できるバロメーターにもなっています。

杉山 「読書」というのは、「読んで書く」。読むだけでは、片手落ちなのです。おそらく、畠さんも体感されていると思いますが、「書く」を伴う勉強もしていいかと、不思議と言葉にキレがなくなってきました。

杉山 では、書くことも前提に、「報徳」の読者向けに、杉山さんおすすめの名言をいくつか紹介していただけないでしょうか。

杉山 二つご紹介。一つ目は「発菩提心を百万回千万回起すべきなり」。これは曹洞宗の道元禅師の言葉で、意志薄弱の凡人も決意を繰り返せば、意志強固な人物に変身できるという教えです。